星月夜

幽鏡

有

引

星月夜鎌倉の代は、日本佛教の精華なり、淨土宗の溫雍、禪宗の孤風、眞宗の德化、日蓮宗の健行萃然として此に鍾る、洵に佛教の發揚當代に到りて圓熟の極致に達せりと謂つべし。玆に大日本佛教靑年會第八回釋尊降誕會を擧くるに際し、當代の佛教を諷詠すべき輪次にあたる、乃ち會員諸氏咄嗟筆を執り、稿忽ち成る、聊か信念の發洩を表する所以なり。今や正さに一大鎔融の時期に膺る、同一の鹹味を味ふもの亦何ぞ四河の別を問はむ。

明治三十二年四月

編者識

目録

表紙繪　横山大觀
法然聖人　常盤棡丘
第一篇　出離の門
第二篇　黑谷の扉
第三篇　吉水の流
第四編　圓光
道元禪師　服部躬治
(一)比叡の麓
(二)天童山
(三)永平寺
(四)勅使門
親鸞聖人　常盤棡丘
二葉、　みどり
仇櫻、　黑染
柴の扉、　みふれ
越路の雪、　筑波の花
雨夜の月、　枕の石
光風、　こがらし
日蓮聖人　久保ゐの吉
第一編　誕生水
第二編　南都北嶺
第三編　清澄山の旭
第四編　松葉ヶ谷草庵(立正安國論上)
第五編　伊豆の濱風
第六編　故郷の秋(立正安國論下)
第七編　佐渡の荒波
第八編　身延山の月
第九編　池上の落日

法然聖人

常盤棡丘稿

◎第一篇　出離の門

流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者、

○

眞如の月は清けれど
五天のむかし雲深く
東漸あとはへだゝりて
み法の花の影くらし　○
かしこけれどもすめろぎの

五濁(ごぢよく)の雨はしげゝれど
浮世におほふ袖をなみ
片州(へんしう)今は露もりて
鐘もかこつか無常の世
崇德の御代は苅菰(かりこも)の

ひたにみだれて天が下
娑婆のさまをぞしめすなる
こゝに易行の栞して
五乘いづれもへだてなく
彼岸に見ゆるみ園生の
解脱の花を手折るべき
道をば後に示します

○

九歳の春にゆくりなく
家尊は非業に世を去りつ
いまはのきはにいひけらく
『われみまかれどゆめな〳〵

ひじり源空は美作の
國はいづこぞみつ〳〵し
久米の南條稻岡の
押領使なる時國の
まな兒ときこえ長承の
二年うつきの七日の日
迹をぞ世には垂れたまふ

讐をうらみそうつせみの
かくてはつるも前の世の
むくいなるらしむくいなり
流轉のまよひきはみなく

生々世々にたゝかひつ
在々所々にあらがはん
輪廻のきづなたえせぬは
うらみこゝろぞ初なる
われは終りをいたむなり
またいたまざる人やある
我は命ををしむなり
誰がをしまざるものあらむ
身にひきかへてこと人の
おなじおもひぞ我はしる

○

野邊のおくりもうちはてつ

現世はげにもつかの間よ
後生のほどぞおそろしき
生死の外に美はしく
てる月もあり花もあり
自他もろともにおしなべて
苦しみもなく樂みも
あらぬ涅槃の常樂の
さとりを得るぞげにもこれ
佛の道にかなふべき
心してよやわごよ〳〵』

梟鐘のひゞきもねもごろに

やがてさる師をたのみつゝ
世外の文をひもどけば
ひとたびきゝていつかまた
ふたゝびとへることもなし
かくもさときを天さがる
鄙にその齢をはつらんは
璞をみがゝずいたづらに
埋むるものと師のことば
ひえのみ山の奧深く
菩提の道に入るべしと
母のみ前にいとま乞ふ
『ゐやまひまをす釋迦牟尼は

十九の歳に國しらす
宮居をいでゝ十二年
勤苦の末に菩提樹の
下に正覺を成りまして
世はとこしへに宇宙の
無漏の光りをあふぐなり
麿は凡なり聖をもて
ためしにひくはかしこけれど
麿も今年は十あまり
三ッの春をもむかへれば
ひじりもぞすむひえの山
をの上に高くすみのぼる

眞如の月の影とめて
むくゆるすべもなみだなる
みめぐみ深きたらちねの
菩提の道をてらしてん』
おい行く末のたのもしく

おぼゆる中にとめかねて
狹き袂のくちつるは
はかなき親のとゞめてし
かたみにさへもわかれぬる
めぐみの母の涙なり

◎第二篇　黒谷の扉

南無阿彌陀佛
往生之業
念佛爲本（法然聖人選述、選擇集）

◎

文殊の像の一躰を
進上まをすの文そへて
源光がりに師の君は

おくりてけるが『我はこれ
及ばぬ身なり皇圓の
阿闍梨こそ』とて源光は

うなゐをそこにおくりつゝ
志學の年に日吉なる
やしろにいとまきこえあげ
やがて出家をとげてける
三年の後に三諦の
奥秘をきはめ藍よりも
一入青きほまれあり
その行末は圓宗の
一の人ともきこゆべく
師もねもごろにそのよしを
きこえつれどもかくろひて
出離の道にすゝまんの

いつかうごかぬこゝろねの
かたきに阿闍梨もほだされて
叡空ひじりの黒谷の
いほりにおくりましてけり
谷深くして水清く
道かすかなるこの里は
暦日なくて空谷に
人跡もなく六情は
うちすみわたり三業も
世のうき雲におほはれず
ひねもす知惠の眼はてりて
修行の足はよもすがら

一心三觀の嶮道を
かゆきかくゆきたどりつゝ
報恩藏にありとある
牟尼一代の經典を
いつたびまでもひもときて
顯をいでゝは密にいり
半をおきては滿をとり

○

横川のながれ手に掬び
そのみなもとにさかのぼり
厭離の岸をおりたちて
欣求の里を見渡せば

こゝら年月かさぬれど
心の奥のむすぼれは
まだとけやらぬわづらひに
飯あまからずいもねせず
えたへぬ折はあくがれて
嵯峨にさすらひ青によし
奈良の都を尋ね行く
みどりくれなゐそめわけて
うしろに行けのすゝめあり
あなたによばふ招きあり
げに末代にかなひたる

み園なりけりいざやこの
四流のながれをたちこえて
濁世にたえし優曇華の
花を手折りてかざゝんと
をたけびませば光明の
ひじりの文はかてゝまた
道のしるべのこまかなり
かへり見すれば墨染の
袈裟を心にきてしより
朝な夕なの解も行も
出離の園に急ぎつゝ

四十路をすぎて三ッといふ
歳にはじめて難行の
あだなるわざをさしおきて
菩提の門にいち早き
易往の捷路えてしより
歡喜のおもひいや深く
踴躍のこゝろたえ間なく
風はふけども決定の
一心いつかたぢろかず
日に七萬の念佛を
たちいさみてぞとなへける

◎第三篇　吉水のながれ

光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨、(佛説觀無量壽經)

○

今は自覺のうどん華を
手折りつれどもこの花を
覺他のために諸人の
庭にうつしてつちかふは
西のみ國のみ佛の
いともかしこきみこゝろに
かなひつべきかかなはずか
千々の思ひにみだれつゝ
ぬる夜の夢にゆくりなく
證をえてぞおぼすやう

『我身の行は塵の世の
外のすみかにをさめてん
しかはあれどもおほかたの
人をばなどかよそにのみ
ながめはつべきいでやいで
有縁の里に身をすてゝ
妙のみ法の種をまき
めでたき花をもろともに
手折らまほし』と黒谷の
いほりを出でゝ吉水に

うつりましてぞねもごろに
ちかひのみ名をときければ
都も鄙も打ちなびき

○

治承の年に天が下
修羅の巷とすさみつゝ
名におふ奈良の東大の
伽藍はやけて跡もなし
かしこき使吉水の
とぼそをたゝき勸進の
重きつとめをみことのる
ひじりいなみてこと人を

遠近なべて朝な夕な
歩みを運び義を尋ね
行をとふものたえもせず

まをしきこえつ年をへて
七堂甍をならぶれば
またおほけなく導師にと
ひじりを召して供養あり
興福東大二大寺の
沙門學生打ちこぞり
八不のことわりさるはまた
三時の教をとひきはめ

いたくひじりをおとしめて
他力の法の行末を
打ちくだかむとさゞめきて
のゝしりつれど珠を吐く
智恵のとばに雲霧の
あとなくきえて今はたゞ
ふたゝび牟尼をまのあたり
をろがみまつるおもひにて

◎第四篇　圓光

極重悪人、無他方便、唯稱彌陀、得生極樂、（源信僧都、往生要集）

○

世は末なれや人はみな

誰れかれ袈裟をおしのけて
手をあはせつゝ敬禮す
これよりながく北の方
比えのみ山も南なる
奈良の都も花の色は
むかしの夢とうつろひて
西のみ國の法の月
たかく空にぞかゝりける

はかなきさまをうとしみて

たのむ相とおもひきや
こふらむ袈裟はなか〳〵に
名利の塵にうづもれて
涅槃のあやもわけがたく
墨染の身はいやまして
うき事のみぞかこたるゝ
あはれ道俗おしなべて
誰かは凡夫ならざらむ
三毒うちにみち〳〵て
三業ともに善ならず
つくるつくらぬことご〳〵く
罪悪ならぬわざもなく
おもふおもはぬみなともに
煩悩ならぬことぞなき
五十一位はいや高く
西のみ國ぞほど近き
作佛の道はげに遠く
往生のみはいと易し
念佛ならでいにしへも
いまもかはらずをさめとり
有智ともいはずまた無智を
なべてすくはん法ぞなき
あなかしこしや三觀の
とぼそをたゝきその奥に

入りしひじりもひたすらに
九品の臺あふぎつゝ
草のいほりにみ佛の
名をとなふれば松風は
苦空をしらべ池水は
無我の響を傳へつゝ
紫雲は四方にたなびきて
西に光明のてれる見ゆ

○

聖暦の年のきさらぎに
法の林に風たちて
吉水のながれ波さわぎ
世にも妙なるうどん華も
うたてや時をまたずして
あるはちりはてあるはまた
過ならなくに天さがる
鄙にうつしてうゑられつ
かくてひじりは百傳ふ
八十路に近き老の身の
都をあとに罪なくて
配所の月を土佐の國
幡多なる里によしなくも
ながむる身とは定まりて

阿彌陀のみ名は末ながく
口になしそとおごそかに
おきてられけりしかれども
ひじりは人におほせける
『よしわれはなほかまひられ
首はむくろをはなるゝも
かゝる琹りのなかりせば
出離の道のたえやせん
都もいまはおほかたの
人はみ法にまふあひぬ
いでこれよりは鄙にして

○

さもあらばあれみ佛の
おほせかしこみ往生の
道をあまねくつたへん』と
都はなれて行く〳〵も
無漏地にかよふひじりとて
室のとまりにはてつゝも
配所の里のもり居にも
くらき道よりぬば玉の
くらきにまよふ世の爲に
念佛の聲をたちやらず
彌陀のちかひをときたまふ

かゝるひじりのいかでしも
いつまで草のいつまでも
難波の浦におふるなる
よしあしわかず齢ををへん
年あらたまり建暦の
八月のある夜くまもなき
月の光りはてりまして
都の人のこゝろねに
またもへだてずすみたれど
二年むつきの初めより
ひねもすまたはよもすがら
いさむ念佛の聲高く

無量壽佛のみつかひを
いまとまちつけその月の
すゑの五日のころかとよ
窗にしらぶる音樂は
歸佛の耳をそばたてゝ
みぎりにみてる妙香は
歸法の袖にかをりつゝ
西に入るさの山の端に
かくろひませば人はみな
法のみ舟の島がくれ
智惠のともしのきえしごと
悲しまざるはなかりけり

和光の月の片州に
てりそめてよりかゞなへば
利生を終へしその歳は
八十路とこそはきこえけれ
元祿の御代にかしこくも
圓光大師と謚ります
雙樹の林たそがれて
曼陀の華はうつろひぬ
跋提の河日は落ちて
波とこしへにむせぶとも

源清き吉水の
末の流れに塵見えず
四海にひゞく大谷の
うるほすはてはきはみなく
華頂の森に音さゆる
知恩の鐘もほがらかに
西山のみどり鎮西の
心つくしのくれなゐは
こゝら雨風しげくとも
色のあせぬぞたのもしき

道元禪師

道元禪師

一、比叡の麓

土御門院のしろしめす
正治二年の春正月、
豐榮のほる朝日子の、
産屋ににほふ折こそあれ、
男女のこゑ〴〵に、
さゞめきわたる久我の殿。
子寶得つとほ手うちて、
父の大臣のよろこべば、

服部躬治稿

幸ませと珠數もみて、
したり顔なり加持の僧。
承元のはしめゆくりなく、
母君やみてうせ給ふ。
またいはけなき幼子の、
終夜喪屋に侍りしが、
几帳のひまをもる風に、

香の煙の中絶えて、
消えゆくすゑをうちながめ、
忽ち悟る無常の理。
伯父の禪閤いとほしみ、
『世にめつらしき賢兒(さかしご)を、
母なきものとなしゝかど、
養ひとりてゆく〳〵は、
家の風をも吹かせむ』と、
おもほし給ふけはひあり。
この世ばかりの愛着心、

それ發心のさはりなり。
五濁の巷を出でゝこそ、
無上菩提に入りもせめ。
有漏のすみかをのがれてぞ、
一切の衆生を濟ふべき。
雲立涌(くもたてわく)の縫袍(うへのきぬ)、
われにありては何ならず。
いざ墨染の衣手を、
浮世の民におほはまし。
頃は建暦二年の春、
櫻かつ散るおぼろ夜に、

比叡の山のふもとなる
庵をたゝく童(わらは)あり。
主(あるじ)の眞觀出でゝ見れば、
まさしく久我のまな子にて、
『出家の願あり』といふ。
こはあさましと驚きて、
『父の大臣の御心も、
おぼつかなきを』と諌むれど、
思ひ立ちつる一念は、
石より重き力あり。

眞觀ほど〳〵感し入り、
遂に自らはからひて、
あくる建保元年の、
卯花月のはしめとよ、
公圓僧正を戒師にて、
綠の髪をおろさせぬ。
剃りあと青き額際、
はやく相好圓滿し。
歡喜のまなざしほがらかに、
既にえならぬ光明(ひかり)あり。
八教の學一乘の理、

探らぬかたもなかりしが、
心の水をたちまちに、
せき留めたるものこそあれ。
本來本法性、
天然自然身、
これ經論の言ふところ、
さらば修行は何のため。
一山の大衆おほかれど、
われに答ふるものあらじ。
誰に問はむとかにかくに、
思ひ惑へる胸のうち、

苦しといひて已むべくば、
さて正法をいかにせむ。
榮西禪師ははやくより、
敎外別傳を說くとかや。
いで試みに參せむと、
のぼりもゆくか東山。
こゝに無明の雲はれて、
今こそ見つれ月の影。
禪師入寂し給ひて、
十年がほどは過ぎにけり。

建仁寺畔見さくれば、
求道のゆくてぞかをりみつ。

二、天童山

貞應二年二月のころ、
明全和尙に伴ひて、
都を出づる旅裝、
またうら若き道芝に、
把る錫杖のかけ曳きて、
曉月さむし別れ霜。
かくて三月（やよひ）の末つかた、
筑紫の博多を船出して、

十方世界のいつこにか、
わが師とたのまむ人はある。
明州の津に着き給ふ。
船長（ふなをさ）呼びてこと問へば、
こゝは嘉定の十六年、
四月ばかりの空とかや。
天童山に聖僧の
ありと人より聞きしかば、
直にそこに赴きて
無際禪師に戒を受け、

坐禪觀法怠らず、
夜を日につきていそしみぬ。
『大善智識のいかなれば、
この過ちをなし給ふ。
受戒の序に順はで、
日本の僧をひたぶるに、
後におくこそ心得ね。
かの草木のたぐひすら、
なほ佛性を持たらずや。
見佛求法の僧の身に、
いかがは自他の別をおく、

よしわれ朝廷に訴へて、
坐位を正しくなさばや』と、
二たび上す表文。
宋の帝もしかすかに、
勇猛心にかまけけむ、
遂に下せり勅詔。
『法の如くに正せよ』と、
春は二たび山のべの
落花を趁うて過ぎしかど、
こゝにて摘みし法の草、
心ゆくべき數ならず。

思ひあまりて立ち出づれば、
龍化の室は遙かなり。
名山巨刹を巡り來て、
再ひかへる天童山。
今の住持は如淨とて、
道眼圓明の禪師なり。
堂に昇りてまみゆれば、
禪師左右にのたまはく、
『洞山大師を迎へつと、
昨夜の夢に見てしより、

奇しと思ひてありつるを、
今朝この僧の來りしは、
あゝこゝちよの勝縁や。
わが法燈は長しへに、
天地の間を照すべし。
たゞこの僧の力にて、
朝夕に參向し、
修行おろそかならざれば、
圓融無碍の月を得て、
胸はさながら豁けたり。
佛祖正傳の大戒も、

今まのあたり授りぬ。
いざや御國に歸りゆきて、
わが誓願を果さまし。

禪師別れにのたまはく、
『汝が學び得し大法は、
たゞ私のものならず。
化を布き德を施して、
あまねく世界を利せよかし。
王侯貴人に近くな。
深山幽谷にあらむにも、
光雲四周を繞るべし。』

いてたちいそぐ夕まぐれ、
偶々見たり碧岩集。
今宵一夜に寫し得て、
明日の首途をたかへじと、
ひとりいそはく窓の外、
夜ふかき空に聲ありて、
『われぞ半をうつさむ』と、
言ふかと思へば怪しくも、
白衣の翁ぞ來ましたる。
十巻の淨寫功終へて、
有明月夜影消えぬ。

むなしき空は颪の音。

三、永平寺

安貞元年春正月、
肥の川尻に船はてぬ。
やがて都にのぼりきて、
建仁寺にぞ入給ふ。

三年がほどは事なくて、
そこにおはすと聞えしが、
寛喜二年の春の頃、
都に近き深草に、
草の庵をしつらへて、
閑居し給ふ聖あり。

われからそれと名告らねど、
こゝや寶處となりぬらむ。
朝出の賤も立寄りて、
しばし砌下に法を聽き、
夕の鴉むながりて、
やがて樹上に戒を受く。
道元こゝにおはせりと、
人さかしらに告げしより、

門のしるべの松かげに、
音なう聲の絶えやらず。
道場建立の願ありて、
勤化怠りなかりしが、
嘉禎二年の冬ばかり、
遂に懷奘を首坐として、
開堂の式をあげ給ふ。
これぞ興聖禪寺なる。
うしろの山の松の風、
さながら法のしらべあり。
戒壇上の一喝に、
破顔微笑みし人やいくそばく。
波多野義重まうできて、
『わがしる國に一ところ
もの靜かなる勝地あり。
そこに一宇をしつらへて、
大師の料にまゐらせむ。
とく／＼思し立て』といふ。
『こゝは田舍の名のみにて、
いたく都に近ければ、
物見がてらに來し人の、

轅をおろすことおぼし。
さらばそこなる山おくを、
つひのよるべと定めまし。』
寛元元年秋七月、
また十六夜の月のころ、
深草の里を立ちいでゝ、
越前の國に入り給ふ。
義重いとゞ喜しくて、
左金吾覺念と事はかり、
二年の四月工を起し、
七月の半寺成りぬ。
地は傘松のほとりにて、
永平禪寺とたゝへたり。
時の執權時賴公、
皈化の信心あさからず、
越前六條の縣にて、
寺領をあまた寄附せむと、
教書を下し給ひしに、
『これわが菩提のさはりなり。
一箇半箇に事足る』と、
うきひき給ふけしきなし。

寛元二年夏四月、
上堂の説法をし給へば、
空に御法の聲すみて、
天華繽紛と降り來る。
をりしも紫雲たなびきて、
とほく微妙の樂聞ゆ。

寶治三年春正月、
羅漢の供養をし給へば、
東の岩の松の上に、
十六尊者現れぬ。

階下の道俗どよめきて、
踊躍歡喜の聲をあぐ。

建長元年かしこくも、
藐姑射の山のあたりより、
紫衣賜はむの勅あり。
三たびは辭ひ申しゝが、
許さるべくもあらざれば、
一偈をさゝげたてまつり、
そのまゝ閣にさしおきて、
ふかき心を藏したり。

四、勅使門

かくて四年の夏の頃、
いさゝか病のけはひあり。
はやく心に期したれば、
これぞ最後の教悔とて、
衆徒を堂に呼ひ集へ、
八大人覺を述べ給ふ。

大師病めりといかにして、
都の人の知りつらむ、
うからやからの文使、
踵をつきて來たりけり。

『とにもかくにも人々の
心のまゝに任せむ』と、
都に向ふ旅のそら。
雲に路ある木の目の山、
輿たてさせてながむれば、
ゆくてもわかず霧たてり。

五年の八月高辻の、
俗弟子覺念の許にあり、
服藥怠りなかりしが、
かひあるべしとも見えざりき。

親鸞上人

帝のおほせかしこみて、
典藥頭のこしかども、
『おぼつかなしやこの里に
奏上せむ』と去りしより、
館に集へる道俗の、
啜り泣きする聲かなし。

つごもりがたの空はれて、
遂に涅槃に入り給ふ。
第一天を照したる
月の光よ今いづら。

大千世界を觸破せし
聖のみかげあやもなし。

さはれ法燈あきらかに、
末世の闇を照しつゝ、
吉祥山の松の風、
なほ常樂の夢破る。
あゝ祖師ゆきて七百年、
二たび開く勅使門。
佛性傳東國師とは、
先の帝の賜ひたり。
承陽大師の諡號は、
今の帝ぞ贈られし。

親鸞聖人

常盤榴丘稿

○二葉

富士の高根の、うごかぬ限り
琵琶の湖の、たゝふるきはみ
不知火もゆる、筑紫のはても
黄金花さく、陸の奥にも
幾萬代の、末かけて
音に流るゝ、大谷の
流のすゑを、手に掬び
○みどり

清きを我も、こゝろにて
その水上を、尋ぬれば
七百年の、そのむかし
塵世のさまを、うつきの空に
雲白きほとり、露をふくみて
おひ出でにけん、常盤かきはの
二葉のまつの、重なりけり

明治の御代に、あなたふとしや
大師見眞と、おくりますひじりは
たぐへんものも、荒たへの
ゆかりの色の、藤原氏
父君の名は、有範とて
いとやことなき、九重の

○仇櫻

まだいわけなき、折のこと
上求菩提の、逆緣を
示さんとてか、父君は
無安の火宅を、去りたまひ
若狹の三位、範綱は

おほみきさきの、司人
また母君は、弓矢とる
もの丶ふの中にも、源氏
義親朝臣の、媛にして
高倉の御代、承安三年
光を和げ、松若といふ

おぢぎみなれば、後見つ
その行末は、紅顔の朝
世路に跨りて、錦きる身を
あすともまたぬ、現身の身は
白骨の夕、郊原にくちんと

まだ九つの、春のこと
粟田の宮丁、まうでさせ
なほしの袖を、墨染の

○黑　染

やがてわけ入る、比叡の奥
道を心に、ふみ見れど
三止三觀の、文窓の前に
百界千如の、月くもりやすく
顯をまなび、密を行じ
螢をひろひ、雪　つめど
五相五輪の、うてなの上に
六大四曼の、花はうつらふ

慈悲のすがたと、かへたまひ
名を改めて、範宴の
少納言とぞ、申してし

かつや北嶺、三千坊
有爲の名利に、柵まれて
南朝四百、八十寺
うき世のちりに、うづもる丶
たそがれの鐘、雲間をもりて
桐の一葉に、秋を知る頃
頭陀のすがたの、なにゆゑなると
範宴ひとり、袈裟にはぢけり

○紫の扉

ひえのみ山に、入りしより
二十年のあひだ、やるせなく
有漏のすみかを、たちはなれ
煩惱の家を、出でんとて
千々にこゝろを、くだきしも
日ごとに行を、かさぬれど
三五の夜半も、ぬば玉の
やみの心の、はれずして
無爲の都は、いと遠く
菩提の門の、見えわかず
九品三輩の、孤雲の上に

易行の笙歌、遙にきこえ
三心五念の、柴の扉に
こゝら聖衆の、來迎ありと
きゝてしばしも、たゆたはず
つひに建仁の、年の春
蘭省鴛鸞の、名をのがれ
荆溪香象の、窓をいで
山おりたちて、吉水の
ながれをくめば、かしこしや
若不生者の、みちかひは
不取正覺の、たのみあり

○みふね

攝取の聲は、胸にすみ
おなじく開悟の、み法にしあれど
八宗九宗、まち〳〵に
ひとしく牟尼の、教といへど
權實眞假、あひわかる
五天震旦、また日の本の
三國にその名、かくれなき
菩薩龍樹の、論を桒りに、
一代經を、うかゞへば
有爲のすみかを、たちはなれつゝ
無漏の都に、入りぬべき

信樂身をも、忘れつゝ

道は難行、または易行の
二つの外かに、あらぬかし
かたしといふは、遠き陸路を
かちのみにして、行くがごと
易しといふは、舟をたよりに
滿帆に風うけ、走るごと
きよきみ國は、難易にあらで
難易といふは、人にあり
疑ふゆゑに、千里とへだち
たのむがゆゑに、咫尺なり

範宴今は、おもひもはれて
名も善信と、あらためつ
人に告ぐらく『いつれの行も
及ぶにかたき、我身なり
奈落ならでは、行へもなみに

〇越路の雪

越路の里は、天ざかり
鄙屋の軒の、いぶせきも
配所の月は、くまなくて
清き心に、すみわたり
いみじく雪は、積れども
慈悲の涙に、いつかきえ

たゞよへる身の、よしやよし
師にすかされて、念佛をはげみ
奈落の淵に、しづむとも
師もまたともに、しづみまさなん
などくやむべき、この身かは、』

野山をおほふ、常闇も
智慧の光に、はれそむる
朝々暮々に、そよとふく
み法の春の、なよ風に
木末に堅き、蕾さへ
ほころびてけり、四方の花

花の雫は、下草の
葉におく露と、結びつゝ
白露の玉は、いづれみるも
み空の月を、やどすなり
『師の君にして、さすらひの

〇筑波の花

高田の場に、幽棲をしむれど
花下蹊をなす、落日の前
稲田の里に、蓬戸をさせど
水鶏は叩く、月下の門
彌勒の世には、おひがたく
牟尼のいにしへ、跡遠み

身とならずせば、天ざがる
かゝる鄙屋に、などかまた
超世の悲願、とくべしや
み法をこゝに、とくもこれ
師のめぐみぞ』と、おぼしてき

無明の谷は、深くして
法性の月、影みえず
むすびてきゆる、うたかたの
夢もうつゝも、わかぬ身を
桃紅李白の、そのまゝに
南無の一念、たのみにて

報土の岸に、迎へんと
二雙四重の、栞して
三願三機の、道芝を
ふみわけ玉ふ、み教は
教行信證、眞化てふ
六巻の文に、つばらにて

〇雨夜の月

たれもらさむの、弘誓の船の
義なきにも、義の具はりて
たのめば近き、この白道を
なにはる〳〵と、思ふべしやは
五天にしては、天親菩薩

浄土眞宗は、この文の
もとゐに立ちし、臺なり
歌舞の菩薩は、筑波の山に
しらべもたへに、なのり出でつゝ
大悲擁護の、かすみの浦に
白蓮紅蓮の、風も香をりぬ

震旦にては、曇鸞の
みことかしこみ、自らの名も
親鸞となのり、たまひつゝ
八万の法藏、うちにたくはへ
愚禿を外儀の、すがたにて

心は浄土に、すみあそべども
あながち世にも、へだたらず
蓄妻噉肉、頭陀にもあらず
または俗とも、わかずして
無戒無律、そのまゝに

〇枕の石

刃もにぶる、板敷の
山路はこゝに、闇はれて
心からなる、月影は
み空に高く、かゝるなり
花前の雨は、花をもよほし
秋後の霜は、錦を促す

往生の機と、説き玉ふ
貪瞋煩惱の、しげきが中に
願往生の、浄心あらば
雲はれねども、雨夜の月の
いつかは西に、入らではつべき

そしり心も、讃佛乗の
因となれるぞ、うれしかりける
蓐の雪も、いつかとけ
枕の石も、やはらぎぬ
心にぞしむ、みめぐみの
あかき光りに、てらされて

江は濁れども、月をうかべ
霞はこめて、鐘の音近し

○光風

寂靜の地に、適莫あらで
柳はみどり、花は紅
無我の域には、人法なくて
霽月淸く、光風すゞし
祈禱祈願の、そのもとは
顚倒心ぞ、初めなる
吉日良辰、えらばむも
我利の迷ぞ、基なる
如來の道に、祈禱なく

うたがひの雲も、轉法輪の
緣となるも、たふとかりけり
牟尼の敎に、物忌なし
四維にまします、み佛は
至誠をてらし、たまふらむ
三世の聖者、皆共に
至信をまもり、ましまさむ
行住座臥に、悲願をたのみ
造次顚沛に、弘誓をあふぎ
朝家の御爲、國民のため
念佛申すぞ、めでたかるべき

○こがらし

鳥邊野の雨、愁を叩き
遠寺の鐘は、哀を傳ふ
龜山の御代、弘長二年
木枯さわぐ、霜月の頃
法の山風、小夜ふけて
片われの月、影くらく
荷葉敗れて　たちまちに
鴛鴦の眠を驚かす

御年九十、今こゝに
下化衆生をば、終ります
大谷のほとり、氣はすみて、
松ふく風も、長へに
おくつき所、千代ふれど、
捧ぐる花の、色あせず
鴨河の流水、白うして
三十六峰、山綠りなり

日蓮上人

日蓮聖人

第一編　誕生水

木も朽ちぬ石も壊れぬ人の名は
人の胸にぞ彫りつべき
はか無し一生は五十年。
春秋の代はあれど天地の
則は違はず盈虧に
月の光は失せはてず。

久保ゐの吉稿

＊＊＊＊＊

宿も無き安房の海邊の海士の兒と
自からいひし上人の
遠つみ祖を尋ぬれば
藤原のゆかりの色の末葉にて
貫名の四郎重實の
次子重忠の四子なりき。

遠江、貫名の郷に住みけるが
平家の亂に故ありて
父祖は安房にぞはふれける

安房の國長狹郡小湊の
漁村夕藻鹽燒く
煙に落ちし一明星。

かしこくも後堀河院世を知らす
貞應元年如月の
春尙淺き十六日。

彼國の鶴の林に火の滅えし
次の日なれば何と無く
死生の契ある如し。

平氏逝き源氏仆れて世の中は
天つ日繼の明らけき
みかげ仰ぐとおもひしを。

鎌倉の山に雲あり北條氏
天を蔽ひて承久の
亂とこそはなりにけれ。

白刄の血しほは洗ふに暇無く
街の伏屍行き難く
大厦高樓人棲まず。

荒潮に御袖濡して涙の音に
心碎きて三上皇
離れ小島にいますなり。

此亂治りはてず墨染に
花も咲きけむ翌の春
暗の中なる星の如

＊＊＊＊＊

安房の國東海邊の小湊に
今も跡あり誕生寺
其所に尙湧く誕生水。

時ありて湧き出る水も枯れやせむ
寺も跡無くなりやせむ
絶えぬ光ぞたのもしき。

師のみ名を留めてあるは木にあらず
石にもあらずとこしへに
人の胸にぞ傳はれる。

天地のあるらむかぎり日の月の
照れらむ極師のみ名も

第二篇　南都北嶺

現し世の人の命ぞ常ならぬ
風の前なる露とても
譬となすに足らずけり。
浮雲のたゞよふ空の上にして
眞如の月の清き如
生死の界をはなれればや。
＊＊＊＊

絶えぬ光とあふぐべし。
小湊を西に離る事一里餘に
紫翠空にあり名は清澄
海を抜く事一千尺。
雲水のよろしきところ鬱々と
老樹茂りて山深し
瑜伽を修するに適ふらむ。

御年十二、天福元年夏の頃
漁村の煙をかへりみて
清澄山の雲に入る。
もしほやく辛き煙に住みしかど
出離の心を父母も
とゞめがたくてゆるしきと。
寺といへど國遠ければこゝに來て
修行する人もいと稀也
師一人ありき名は道善。

御年十八始めて、得度の式をあぐ
字は蓮長名は是生
後改めき日蓮。と
世は亂れ臣子のけちめ明ならず
武士は馬前の功をおもふ
鎌倉幕府の末にして
唯ひとり清澄山の雲の中に
輪廻のほだしときてむと
おもひ入りしぞありがたき。

師につきて始め眞言を學びしも
阿彌陀佛をば賴みしも
心にかゝる疑雲あり。
願はくは法藏界にわけ入りて
遍く經論をよみ破り
弘く人師の説をきかむ。
うれしくも叡山の僧、尊海師
鎌倉にあり、はる〴〵も
山を立ちいで〻おもむきぬ。

隨ひて京(みやこ)の方へいそぎしは
御年二十一にして
清澄修業の數年后。
あはれ〴〵疑をのせて舟はいでぬ
波浪遂にのむへきか
疑團遂にとくべきか。
かへりみる清澄山の老松も
おのがしらべを法華經に
合はせむものと知ずけむ。
＊＊＊＊

叡山は傳教大師逝きてより
多くの年をへつれども
見るべきもの〻無きにあらず。
しかれども洋々たる望、空しくて
道をとふべき僧も無し
唯經論を閲しけり。
東して叡山を下り大津の濱
三井寺にこそ入りにけれ
又道をとふによしもなし。

西の方京の地に入りて承陽師
辨圓師にはあひしかど
黒谷の明星今はあらず。
しかれども念佛(ねぶつ)の聲は谷より谷
山より山にひゞきつゝ
遺業歴々眼にありき。
空にみつ大和の國青によし
奈良の舊都の諸大寺も
蟬のもぬけに異ならず。

吉野川早瀬渡りて紀伊の國
高野の山にのぼりしも
望の星の見えしにや。

をしむべし弘法大師逝きてより
寺院ばかりは變らねど
法燈日々にうすれ行く。

＊　＊　＊　＊

清澄の山を下りて鎌倉を
出てにし日より十餘年
名山靈地は皆ふみつ。

燃ゆる火のもゆるが如き上人の
胸のおもひは消えにしか
それ中々にあらざらむ。

厚氷、氷の如き疑は
遂に跡無く解けつるか
それ中々にあらざらむ。

もゆる火に薪をそへて吹く風を
氷にそへて上人は
安房に再びかへりけり。

第三篇　清澄山の旭

十二年、南都北嶺に雪を積み
螢集めてかへりつる
上人既に學成れり。

法の舟、はる〴〵さして出でしかど
心にひそむ疑は
化して一團の火と成れり。

いたるところ、感慨の涙押へがたく
衆生濟度のこゝろざし
胸に溢るゝおもひあり、

いつこにて如何なる聲を作さむとや
忍ぶ〳〵もかへりけむ
昔遊びし安房の濱。

鷙鳥の搏たむとするや先ひそむ
清澄山に又攀ちて
默念すること一週日。

御年は三十二といふ春の朝
山のたかねに上られき
今も跡ある朝日森。

漫々たる大海原のはてしより
のぼるあさひに打ち向ひ
始めて口を開かれき。

せきとめしおもひの川の決れには
あまり短き七字にて
南無妙法蓮華經。

須彌山の原の一塵蒼海の
始めの一露にたぐひつゝ
この題目をとなへけり。

海士の子を昔迎へし峯の松
この一聲を今日聞きて
如何に調を換へつらむ。

花摘みに昔ふみけむ山の丘
今日より後は消えがたき
御あしの跡となりにけむ。

火はもえつゝ聲はおこりつゝ清澄山
舊師道善の持佛堂
堂の南の面にて

今いはゞ命無けむとおもへども
人をおそれていはずんば
阿鼻の地獄におちはてむ。

かくの如、決するところありければ
念佛は無間禪天魔と
說きて憚ることところ無し。

この時は念佛盛に禪宗は
幕府の歸依もあつき故
舊師驚き衆走る。

朝廷には後深草院しろしめす
建長五年春三月
後の八日の事なりき。

上人は今は我身の身にあらず
全身は唯、法の核
唯もえのぼる法火のみ。

向ふところ豈敵あらむや、いふところ
何憚からむや、鉄推を
諸宗の上に加へたり。

世の人の四個格言を呼ふめるは
念佛無間禪天魔
眞言亡國律國賊。

罵の聲はあまりに高ければ
おもふところを枉けすして
進みし跡ぞいさましき。

我こそはみ法の爲の日月なれ、
あらゆる宗の師範なれ、
衆生濟度のおやなれと。

おたけびの聲は狂ふに似たれども
信念まこと厚くして
嘗てやまぬそありがたき。

東條の地頭は固き念佛者
殺意ありしが上人は
辛くも虎口をのがれたり。

西條の花房邑にひそみしが
こゝも念佛盛にて
屢害を被れり。

鎌倉は幕府の外に諸の
宗旨布教の中心と
安房を見すてゝ船出しぬ。

第四篇　松葉が谷草庵
（立正安國論上）

鎌倉や松葉が谷におりたちて
しばし隱れき上人は
妙なる花を手折るべく。

火の如き心をのせて上人は
法敵充つる鎌倉へ
何殊更にすゝみけむ。

もえ出し此の炎は大空を
立ち被ふ迄はやまざらむ
あはれやあはれ活火山。

狂へりと人に呼ばれて鎌倉の
街に立ちき上人は

題目七字を唱うべく。

禪宗を力と賴む幕府故
寺は興れり建長寺
僧は來れり道隆師。

淨土には良忠師あり盛りしが
松葉が谷は寂として
月かげのみぞ唯させる。

尺蠖の伸びむとするや先縮む
こゝにかくれて聖人の

修行を積める年久し。

更に又駿河の國にいで行きぬ
岩本の里、實相寺
藏經多しと聞きしより。

法敵を斬らんとおもふ燒太刀は
精練更につみ來り
猛火再び薪あり。

鎌倉に文應元年かへり來て
叫びいでたるその聲は

曰く立正安國論。

この爲めに聖人泣けりこの爲に
又怒りけり聖人の
一生は一部のこれにあり。

我こそは卑賤の家に生れしが
敎主釋尊この國に
下しましきとをもへりき。

立ちのぼる松葉か谷の夕煙
細きかげをも尋ね來て

敎を仰ぐ日朗師。

敵國の一つを得しに似たりとて
六老僧の第一位
日昭を得しもこの時ぞ。

＊＊＊＊

地震ふりて山岳くつれ雷鳴りて
大水降り海溢る
飢疫相尋いて人空し。

乞丐等は相携へて饑に泣き
道に伏せる屍は

渡さは橋となりぬべし。
善き神は去りて跡なし聖もゆけり
天魔下りて鬼應ず
天災起りて地異も湧く。
あはれ〳〵痛しき哉數十年
百千万の衆生は
魔緣の波に漂ひき。
法然の後鳥羽の御代にいでしより
民を邪信に陷れ

國を累卵の上におけり。
今にしてこれの邪法を除き去り
法華の正法立てざらは
國家の安危おもふべし。
百萬の空しき祈をせむよりは
佛敵邪僧の頸はねて
この災害を除かまし。
念佛と律と禪とを皆さりて
法華の正法起りなば

未前の大害防くへし。

＊＊＊＊＊

暴れはてゝ河にのそめる虎の如
流落一過の星に似て
世をおどろかす安國論。
幕府をば諫むとせしが中々に
人の耳には入らずして
危難を招くこの一聲。

第五篇　伊豆の濱風

疾風の大樹を仆す力もて

平水に鞭を揮つて波をたて
民を迷はすものなりと
罪は下れり上人に。
弘長の元年五月時鳥
血に泣く聲に送られて
伊豆の海邊に流されぬ。
他宗の上に鐵推を

揮ひ玉ひし聖人は。
おそるべき毒蛇に似たる舌をもて
皆賊なりと世の僧を
罵り玉ひし聖人は。
鎌倉や由井が濱邊を船出しぬ
法衣の袖にかゝり來る
涙の外には友ぞ無き。
高弟子、日朗のみはみ供して
由井が濱迄來りしが
種々の供養を怠らず。
聖人の彼れにおくりし文よめば
萬疊の波に打たれけむ
心細さもしらるなり。
『この濱の地頭も民も皆非なり
名を聞くものは名を憎み
目に見るものは又怨む。
三伏の炎天近き五月也
伊東の浦の漁家にして

尙行くさきは許されず。
岸邊より、師の君呼びていひけらく
『月の入る時おもひいでむ
旭に我を忘るな』と。
千行の涙拭へば又千行
涙に搖られてつきにしは
伊豆の伊東の川名なり。
船守に人あり人あり彌三郎
夫妻心を一つにて
米も多くはあるまじを。
過ぎし世に法華の行者とありつるが
今の濁世に船守と
生れ出しか、知らまほし。
安房にます我父母の伊豆の國
伊東川名に生れ來て
はぐくみますか聞かまほし。
法華經第四にいへり「信士女の
いでゝ法師を供養す」と

おもへば愛しき夫妻かな。
道こそは此所と川名と近けれど
　心は遠し、後の爲
　　書きつる文ぞ心得よ』
しかれともよせてはかへる波の如
　立ちては消ゆる風の如
　　信念のみぞかはらざる。
鎚を以て打たるゝ鐵を見てもしれ
　精練の太刀玆に成り
　　不動の信念凝り來る。
世の中に生れていでたるうれしさは
　朝な夕なに法華經を
　　誦みて後世を願ふなり。
罪とこそ盜、夜打をいひもせめ
　南無妙法を世の中に
　　弘めむ事は何なりし。
中々に我を罪せし國主こそ
　我を護せし敵こそ

　　深き恩の主なれ。
法華經の爲めに罪得し我身故
　尙法華經を修行して
　　來世待つべく思へばと。
伊豆の海、海よりひろき師がこゝろ
　　波に動かぬ大岩の
　岩より堅き師がこゝろ。
二十二の月を閲して罪赦りぬ
　ふたゝび歸る鎌倉路。
　　時に御年四十二』。

第六篇　故郷の秋（立正安國論下）

鎌倉にかへり來りて又入りぬ
　松葉が谷の舊草廬
　　弘通の法を講ずべく。
無間業と先に誹りし淨土宗
　天魔とせめし禪宗は

更に起れりねたき迄。
禪宗は幕府に入りて北條の
治政の基となりしかば
武家は悉歸依せりき。
浄土宗、今は遍し鎌倉の
山に浦にも念佛の
聲を聞かぬは無かりけり。
草庵を更に見捨てゝ故鄕の
安房の故舊を尋ねしも
病おこりて仆れけり。
大八州國内々々に法華經の
流布せむことの就るべくば
母の命をかへしてと
花を折り水を掬びて上人は
世尊の像に打ち向ひ
法華經をぞ誦じける。
眠よりさめたる如く甦かへる
應死の業も轉ずべし

弘通の心ありしにや。

****

亡き父のみ墓の草を掃ひてむ
老いたる母を訪ひてむと
安房に一たびかへりしは。
文永の元年の秋ふけし頃
露に涙に昔見し
月やさながら宿りけむ。
師を見るや古稀の齡の母君は
おもひもかけぬうれしさに
四年さへこそ生きしかと。

****

良忠師一たび東下、鎌倉に
念佛のをしへを布しきより
安房にさへこそ弘れり。
聖人の故鄕といへど中々に
敵の境に入る如く
射る矢、劍は身にせまる。
法の爲め怨をうけて死なむ事
疑もなし一度は

古老を見むと來しものを。
東條の松原といふ里にして
おもひもかけぬ要撃に
手疵をさへぞおはせける。
奇しくも虎口の難をのがれ來て
いよ〳〵ます〳〵法華經の
信心のみぞまさりける。
雲風を待つらむ池の龍の如
又鎌倉に閉ぢ籠り

時のいたるをまたせけり。

＊＊＊＊＊

天外の飛報は落ちて吾國の
上下忽ち湧く如し
蒙古襲來これなりき。
風起ちて眠れる虎の醒めし如
勇氣身にあまる聖人は
今や雲雨を喚ばむとす。
聖人は宿谷光則に書きていふ
『天災地異のおこりしは』

邪宗に歸依の爲にして。
遠からず國の危害もいたらむと
安國論にいひつるは
今は眞となりにけり。
君の爲國の爲にも神の爲
佛の爲めにも聞えてよ
國救はむは我のみと』
鎌倉の時の執權、時宗に
聞えし事も亦同じ

『日蓮出でずば如何せむ』と
建長寺、宋の高僧、道隆師
極樂寺には良觀師
共に上下の歸依厚し。
聖人の氣は天を呑み志は
青雲の上にかけれども
元雲水の一雛僧。
かの二師に文をおくりていひけらく
『羅漢、佛と人はいへど

増上慢の僞聖。

寄せてくるえびすの國の大兵を
いかで調伏せらるべき
國はなか〳〵亡びなむ。
來む世には無間におちむ、來む世には
那落に入らむ今にして
早く前非を悔いよかし。
釋尊は依法不依人と仰せずや
日蓮に歸して此よしを

鎌倉殿に聞えてよ』
鎌倉の五山をはじめ十一寺
同じ事をばかきおくり
更に弟子におくりしは。
『おもふ事遂に言ひたり今よりは
罪を待つのみ諸子として
されどおぞろく事勿れ。
生と死の縛をきりて果をとげむ
妻子眷屬をおもはざれ

又權威をば懼れざれ。』
渺々たる雲水の身の聖人は
獅子奮進の勢に
猛火の中へ身を投げつ。
いたづらに聖人を以て吾宗を
弘通せむ爲、國難を
利用せりとはおもはざれ。
自らも安國論の命中を
驚きし迄法華經の

功德や深く信じけむ。
我はこれ法華正法の使なり
沙に黃金を換ふべくば
臭き頭を何せまし。
諸宗より怨は集り幕府より
勘氣下れり文永の
八年九月十二日。
あはれ〳〵いかに成り行く末ならむ
風强ければ浪高し

龍大なれば雨猛し。
死罪をば思ひの外に遁れしが

第七篇　佐渡の荒浪

見渡せば遠山近山雪深み
心の跡もたえはてゝ
草堂軒は傾きぬ。
夢さめて半夜枕を攲つれば
破れたる壁に吹きすさぶ
風の音のみ耳にあり。

行路漫々佐渡が島
そこに流罪と定りぬ。
おゝひきや餓鬼の街をゆきめぐり
此世ながらにおそろしき
地獄の冬におちむとは。
彼蘇武が胡國の雪を食と爲し
羊を飼ひて老いけむも

今は我身の上となりぬ。
百尺の雪も遂には消えぬべし
あゝ如何にせむ雪ならで
日々に加はる淨土の徒。
空林のあらしも遂に和ぎぬべし
我をせめ來る念佛の
此ひゞきをばいかゞせむ。
朝には一部の妙法手に握り
草堂をいでゝ日を仰ぎ

法華止觀を眼に曝す。
夕には五塵出離の雪をかみ
氷るが如き月を見て
題目七字を先づとなふ。
蟻の如集り來る法敵は
信濃越路の境より
塚原の里に輻輳す。
權實の鋒を交へて襲ひ來る
敵の質疑も解けゆきて

利劍に瓜をきる如し。

木枯の聲にもまさるのゝしりの
ひゞきはやみて歸依せしは
あらしに靡く草に似たり。

佐渡が島波に寄り來る四星霜
凮に雪にも堪へたり
法戰いく度贏ちえたり。

百難は逝いて千難又來る
堅き心に光あり

碎けぬ信に力あり。

隣あり豈孤ならむや隣あり
島の人々日に月に
法華の波に浴みゆけり。

はる〳〵と文にをしへをかきそへて
信徒弟子におくりけり
中に觀心本尊鈔。

御をしへの究竟のところはこゝにあり
いのちをかけて聖人が

證しせりしもこゝにあり。

雲となり雹となるも涙となり
鏡となるもそのもとを
觀じ來れば水一滴。

唯一つやどるこゝろを外におきて
十方法界何ならむ
本來無作の佛なり。

折伏門と安國論を見るべくば
是ぞ唯一の攝受門

題目こゝに成れりけり。

日蓮のこの頸きれむ時の爲
不思議をのこしおかむとて
開目鈔をかゝれしも。

塚原の三昧堂前寒凮の
枯木にさわぐ夜なりけむ
吹雪を誘ふ夜なりけむ。

山烏頭白くはならねども
赦免の書狀おち來り

法の花咲く春は來ぬ。
三とせあまり修行をつみて數ふれば
文永十一、春彌生
かの塚原の船出しぬ。
鎌倉をいでにし時に聖人の
『日蓮、明日は佐渡か島
海山越えてまかるべし。
法華經、殿の胸にはやどるとも
あはれ今宵の寒けさに

獄(ひとや)の中やいかならむ。
口にこそ人はよめども法華經の
心はよまず身に添へず
色心二法は殿にあり。
必らずや在天諸童子おりまして
殿のあたりを守るべし
必ず殿を守らなむ。
見まくほし見えもせまほし獄をば
出づる疾く〳〵尋ね來よ

佐渡か島にて待たまし』と。
ねもごろにかきのこされし日朗は
牢(ひとや)ながらに許し得て
八度(やたび)迄もぞ師を訪ひし。
ある時は峨々たる岩を踏みさぐみ
危き海をわたり行き
師に糧食を供してき。
此師ありて此弟子あり聖人の
熱き涙を見てぞしる

怒は法の爲なりと
牝鷄(とり)すらも雛の爲めには毛を立てゝ
猛き猫にも向ふなり
況や法はこれ命。
あはれ〳〵離れ小島の荒波は
法の花をばさかせつる
師には第二の淨池なり。
中々に嵐は花の爲めにして
浮雲(ふうん)は月の爲なりと
師の跡見てぞしられける。

第八篇　身延山の月

立ち渡る身の浮雲も晴れぬべし
たへのみのりの山風と
歌ひ玉ひし身のふ山。

富士川の早瀬を下す船の如
流轉やむ時無けれども
鼓聲はたえず久遠寺。

＊＊＊＊

いかならむ山に谷にも入りてむと
佐渡が島よりいでし時

念佛と禪と律との俗僧の
首を斷ちて由井が濱
渚の波に洗はせよ。

眞言の敎はことに日本の
大き咒咀（のろひ）となりつべし
弘法彼はしらざりき。

王土故地ふむ身こそまけのまゝ
したかひまつれしかれども
こゝろはおのか心ぞ』と。

心の中に定めしを。

さりともとおもふこゝろのふかくして
四月の八日頼綱に
同じ事をぞ聞えける。

『年の内に蒙古來らむ我行かば
誰かは國を助くべき
若し信あらば吾が爲めに。

三度迄諫めし詞いれられず
今は山林に入るべしと
由井が濱邊へ立ちいでつ。

同じ年五月のなかばなまよみの
甲斐の波木井につかせけり
時に御年五十三。

苔青き霞の洞に分けいれば
古柏の枝の梢より
法衣におつる露點々。

雲の如(ごと)危き峯をながむれば
老松枝をさしかはし
靜かに動く風颯々。

打ちしめり雨に包める朝には
雛の花を手折り來て
世尊の前に奉る。

おぼろ〳〵霞む夕(ゆふべ)は月かげを
のぼるおそしと待ちつけて
妙のみのりを又誦ず。

おりたちて谷の流にあか汲めば
實相眞如の月かげは
さながら桶にやとるなり。

春されば法の筵の讀經には
庭の木に來て鶯も
法華經とぞ合すなる。

甘(うま)じもの革の毛衣何せまし
忍辱はこれわがころも
法喜は即ちわが供養。

法華經の功德は虚空に餘るべし
あした夕に讀經して
こゝにある事九年(こゝのとせ)。

この山に入りての後は年老いぬ
さあれ心は壯にて
敎化の道をおこたらず。

牟尼佛の鷲の御山にあらねども
身延の山の山風は
隨喜の淚を催せり。

たのもしや信徒は遠く相模より
上總安房より集ひ來ぬ
佐渡より來しは阿佛房。

門弟に日朗日昭日興あり
出てゝは附近に法を布き
入りては敎を師に仰ぐ。

三度迄爭ひたりし聲よりも
身延の山の松風の
おとこそ弘くひゞきけめ。

しかれども師の一生は苦をいでゝ
難に又いるおもひあり
身延の山も亦しかり

一駄の鹽に向ひて答あり
「この地よりしも倘厚く
虚空よりしも倘廣き。
この惠この志をいかにせむ
釋迦牟尼佛と法華經に
讓りまゐらせ候ふ』と。

一駄の米に向て又いへり
『夏は帷(かたびら)あつわたの
小袖は冬ぞうれしかる。
積雪は五尺にあまりて樵路絕つ
衣うすうして風寒し
食盡きはてゝ死なむとす。
かゝる時命助けの御(おん)とらせ
法燈(ほつとう)の油又そはる
あはれ貴き心よ』と。

艱難も丈夫の心は枉(ま)げがたし
浮雲(ふうん)も遂に月光を
奪ひかたきがまことなる。
浮雲(うきくも)もいつしかはれて身延山
滿ち足ひたる月のかげ
たえぬ光は世にぞしく。
滿ちたるはかけやすくして上れるは
傾きやすしあはれ〳〵
弘安五年秋の頃。

何となく萩の上風身にしみて
八苦の難はさりがたく
病の床にふしませり。
何事をおもひましてかあはれなり
九たび春秋をおくりたる
身延の山をいでましぬ。
數多き弟子信徒に扶けられ
傾く月の思して
池上へこそはつきにけれ。

第九編　池上の落日

憶ひ起す鷲のみ山の艮の
跋提河邊の沙羅双樹
變じて白き涅槃の日
法性の空に遊べる釋尊も
生死の界はいでざりき
況や迷の凡夫をや。
我も亦身延の山の艮の
玉の河邊におりたちて
爲樂の地をば求めむと
聖人の詞によりて武藏のや
荏原の郡池上に
十日を經てぞ着かれける。
枕邊に弟子信徒を召ひ集ひ
安國論をみ手にして
講じてのちにのたまはく。
『我死なば身延の山を基所となし

わがなきからを埋めてよ
三七日に我死なむ』。
法華經一部十巻は日昭に
安國論は日朗に
とゝめおかむとさためけり。
いたましや弘安五年神無月
前の三日は何の日ぞ
地祇悲みて地震ふ。
枕頭に涙を拭ふ六人の
嘆きの内に法華經
誦じながらぞ逝きましゝ。
面をば西に向けさせ頭をば
北におかせて化し玉ふ
時に御年六十一。

＊＊＊＊

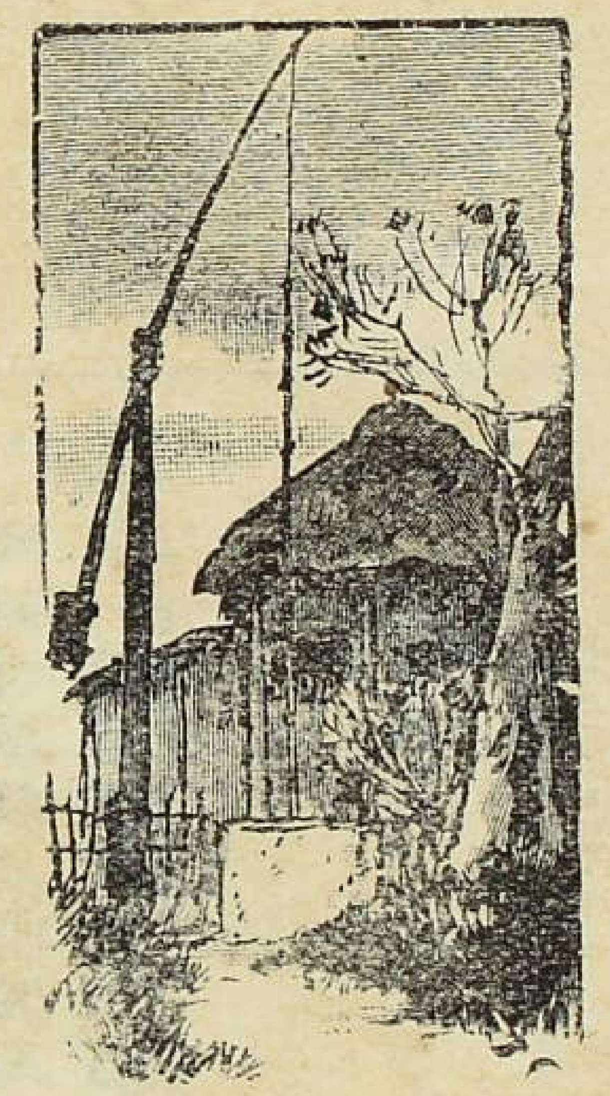
悲哉慧日は既にいりはてゝ
慈悲の眼は又開かず
微咲僅に殘れども。
悲哉法燈忽消えはてゝ

化道の唇固く閉つ
再び獅子吼を聞きがたし。
檀越も弟子も泣けり悲めり
涙は流れて川の如し
息は空にみちて風に似たり。
あはれ也、非情の風物又むせぶ
河流滔々泣くが如く
山林の風は哀の聲。
なきからは遺言によりて荼毘となし

弟子再びみともして
身延山にぞ埋みける。
甲斐の國身延山の久遠寺
今も讀經の聲すなり
後も鼓聲のひゞくらむ。
いふ勿れ、安房の海邊の海士の子と
四河の鹹味も海に入らば
誰か味ひ分つべき。
數ふれば六百餘年の今にして

五千有餘の堂宇あり
數百萬の門侶あり。
誕生寺、門前の岸に打ちよする
波の音をし聞く時は
たへのみのりぞしのばるゝ。
甲斐の國、身延の山のいたゞきに
い照る朝日を見る時は
高き光ぞ仰がるゝ。

星月夜 終



明治三十二年四月五日印刷
仝　年四月八日發行

定價金七錢

版權登錄

編輯兼發行者　東京市本郷區森川町壹番地橘通リ三百拾壹號　近角常觀

印刷者　東京市牛込區矢來町三番地　吉岡嚴八

發行所　東京市本郷區森川町壹番地橘通リ三百拾壹號　大日本佛教青年會

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町壹丁目拾貳番地　株式會社秀英舍第一工場

大日本佛教青年會趣意書

本會は、佛教を信奉する青年の團體にして、自家の安心立脚の地を定め、一致團結、進んで斯教の闡揚を圖るを以て第一義とす。回顧せば本會の淵源頗る遠し、明治二十五年一月、帝國大學、第一高等學校、東京專門學校、慶應義塾、哲學館、法學院に於ける有志者、檄を傳へて會盟し、肇めて佛教青年聯合會を組織せり、席上議決するもの二件、釋尊降誕會及夏期講習會是なり、爾來着々之を實行し、遂に年々の事例と爲り、今や大方の贊襄により益其規模を擴張するの柰運に膺れり。明治二十七年四月に至り、聯合會の組織或は江湖同感の士を渙さむことを恐れ、合して一團と爲し、大日本佛教青年會を創立し、各地に支部を設け、諸方の團躰と連絡し、着々種々の事業を擧げ、遂に今日の隆盛を致せり、然れども從來の事、本會初志の萬一に酬ゆるにたも足らず、將來一段歩武を進め、教育事業、慈善事業、社會事業、傳道事業の如き、都て純潔なる佛教主義を以て施設經營し、聊か邦家に報効し、社會に貢献する所あらむとす。今や時機切迫正さに宗教信者たるもの猛然として起つべきの運に際す、而して本會員亦恰も凡百の社會に彌り、大に力を致すべき基礎既に成る幸に佛天照鑒のあるあり、鞠躬盡瘁斯教の爲めに猛進せば、庶くは佛光を絃に光被せしむるに庶らむか、今や四方同感の士團躰若くは個人として入會を通告せらるゝもの續々臻る、乃ち本會の趣旨を略叙し、同志諸士を招致する所以なり、終りに臨み一言す、

本會は徹頭徹尾通佛教の主義を執るものなり、吾人嘗て世上に告白して曰、金杖一たび折れて數段に分ると雖、段々皆金片たるを失はず、分け登る麓の道多しと雖、何れも高嶺の月を望む、佛教固より無我を以て宗とす、豈宗派の異同を問はんやと、是本會の固く執て動かず、由て以て終始せんと欲するものなり、今や正に大合同の時機に屬す、冀くは同感の青年諸士來り會せよ。

入會手續

一、東京在留の人にして入會申込まるゝ時は本部に至り會員名簿に自筆署名せらるべし
一、地方より入會申込まるゝ人は自筆署名捺印の上郵書を以て送致せらるべし
一、右何れも規則第八條により會員二名の紹介を要す若し會員中に知己なきときは自己の經歷を具して本部に申込まるゝときは特に其便宜を與ふべし

東京本郷區森川町橋通三百十一號假事務所
大日本佛教青年會

（本部直接）帝國大學、第一高等學校、東京專門學校、慶應義塾、哲學館、法學院、千葉第一高等學校醫學部、曹洞宗大學林、淨土宗高等專門學院、音羽大學林等
（支部及連絡）關西佛教青年會、第二高等學校道交會、第四高等學校內支部、第五高等學校內支部、愛知醫學校內支部、北陸佛教青年會、大聖寺威德青年會、大阪佛教壯年會等

夏休講習會の豫告

第八回夏期講習會來る本年七月北陸の勝區越前敦賀港に於て開く殊に本年より其規撲を擴張し大に力を會員相互の修養に盡さむとす且つ敦賀の地四通八達東西及北陸の要路にあたる希は四方有志の諸士奮ひ來りて共に微妙の法水に浴せよ

大日本佛教青年會

政教時報

每月二回發行定價一册金二錢五厘一年分六十錢無遞送料郵券一割增凡て前金の事

本誌を發刊するに當り余輩之か辭を爲りて曰く

星月夜

今や我國民は宗教を無用視し、道德を嘲り、風俗習慣を重んぜず、政治家は宗教を離れて政治を行ひ、哲學者は道德を忘れて道理を尋ね、實業家は正義を顧みずして金錢を求め、教育家は宗教家を排斥して教育の完備を期せんとするもの多し、而して人情風俗は、かゝる政治家、かゝる哲學者、かゝる教育家、かゝる實業家によりて、日本今日の狀態となれり、日本の文明は果して之によりて、滿足することを得べきか、思ふに日本國家には生命あり、未だ信仰なく未だ道德なし、豈いふべきの時に非ずや、行ふべきの時に非ずや、

と、吾人の期する所のもの亦こゝにあり、今や着々として實行の方面に向へり請之を今後に徵せよ。本誌載する所、社說、論說、會報、社會、雜錄、信界、今昔の諸欄とす若し夫れ本誌の抱負と本誌の價値にいたりては世既に定評あり吾人また贅せざるなり。

東京市本鄉森川町一番地
發行所　佛教徒國民同盟會出版部